

針葉樹會報

通卷第八十一號

花とスキー

P E N



お正月のスキーの事は頼んだよと言つて行つてしまつた。考へて見たが、どうせなさるなら一、立山彌陀ヶ原行、二、木曾御岳、三、乗鞍飛驒越とコンちゃん嘆く所の三、〇〇〇米級を大きくふきかけて、外に小谷温泉と、一ちゃんが行くと言つてた最上高湯を附け加へて手紙を出した。所が賢明なる（笑つちやいけない）コンちゃんは一月の天候は當にならないから皆と一しょに藏王へと言つて來た。

十二月三十日午後四時、長途懸軍の近ちやんが恙なく東京驛に着いて電話。今晩十時に上野驛で會つて一日の夜の寝台券を買ひに行こうと約束する。思へば寒い話である。曜月三十日の夜は吐く息も白い。それを霜凍る午前零時を切つて落して賣出す寝台券を買ひ込むのである。僕は二の足だつたがコンちゃんは今晚はねなくても、一日の夜汽車でれた方が好いと云ふ。

約束の時間に約束の上野驛の待合室に待つこと暫時。大きな眼をクリクリさせやつて來て「どうしたんだ。」「何がどうしたんだい。」賣言葉に買言葉である。近ちやんは待合室の前で待ち、僕は中にゐた。

會ふべくして會はぬ運命の皮肉はかくして起る。然るに會つた運命は更に皮肉にもつれる。「駄目なんだよ。聞いて見たら今晚十二時から賣る寝台券は二日の晩のだつてさ。一日のは今朝もう賣切れだつて。」アツト驚いた。次にホッと安心した。孫さんにこんな約束でもしようものなら「だから言はないこつちやない」と叱られる所だつたから。

仕方がないから銀座へ出た。暮の銀座通は賑やかだ。その何萬人かの人の波の中に二十四時間遅れて寝台券を買ひに行つたアキレた二人がもまれてゐたのだ。

軽く暖まつてぢや元日の晩にねさ別れた。

昭和十四年一月一日の夜、年賀廻りを危きり上げて上野驛にかけつける。暮から正月へかけての汽車はもの凄い混み方だ。一ちゃんが會社の人さ来てゐる。待つ程に列車が来る。ドツと雪崩れこむ。押しあひ、へしあふ。

謙讓の道徳は既に反故紙に等しい。
現實を凝視せよ！

持たざる國日本の政府は國民にかくあるべし鍛練の道場を提供してくれる。

辛じて座席をとつて一應見渡す。此處で登場人物を紹介せねばならない。

正月だけに髪のあさも青い一ちゃん。長いスキーを持つた手塚君、姿を見ないがコンちやんと吉澤の松さんが何處かに乗つてゐるさ云ふ。針葉樹會員は是丈けである。外に團體生命のEちゃんと三越のKちゃんの二名花。同じく團體生命のIさんと云ふ青年。僕を加へて都合八人である。

買へなかつた寝台券がうらめしい窮屈な汽車の一夜を過して二日朝六時半山形驛で下りて松さん、近ちやんに對面する。雨がシトシト降つてゐる。驛前の旅館で朝食をさりながら宿の女中さん聞くとこの雨は今朝珍らしく降つて來たのださ云ふ。時間を聞くと丁度吾々が山形へ着く頃からなので今更ながら松さんの雨男振りの靈験あらたかなのに一同顔を見合せて驚く。

遅い朝食をすまして二臺の自動車に分乗して半鄉迄飛ばし其處から荷物は馬橇に預けてスキーを肩に歩く。歩きながらも時々雲

間からバラ／＼頬を打つ雨が來る度にみんな松さんの顔を見ては嘆息する、顔は見る丈けだから好い様なものの觸つたりしてへりでもする物だつたらあの圓満な松さんの顔は高湯へ着く迄には使ひ古した石鹼か何かの様にすり切れたか、或はスツカリ消えて無くなつてしまつたかも知れない。

一時半高湯着。一ちゃんの「顔」で壽屋旅館に落着く。此處の若主人堀修一氏はスキーが巧く、今年の山形縣講習會のコーチャーをして居り寫眞も上手である。三階の二間を通して「日本山岳會吉澤様御一行」の貼紙の部屋に入つて一休みするさ動くのが嫌になる。それでも元氣で出かける若い人につれられて一時間ばかり滑る。

夜は一ちゃんの歌、近ちやんの本當の様な話。惜しむらくは孫さんの話術がないのが淋しい。ノンビリ温泉に入つて福袍で炬燵にねころんで明日の朝飯は何時でも好いよなんて云つてられるんだから久し振りでスキー場氣分を味はつた。

朝飯は何時でも好いと云つたので三日は九時半頃に持つて來た。從つて出かけるのは十時半であつた。今年は道が温泉から真東に鳥兜山の北を廻つて獨鉛沼から南へ向いて藏王小屋まで電話線が通じその電柱に沿つて指導標がつけてある。二時間足らずで藏王小屋に着く。小屋の近所で少し遊んで三時過、一應足弱車を先へ下して暫くして行つたら紅葉峠の所で出會ふ。紅葉峠から林間を抜けて獨鉛沼へ。沼から見返峠を越して急傾斜を過ぎるさ一氣に高湯へ。但しこれは餘程上手な人で我々はとても一氣には行けない。でも愉快な下りである。此處で皆の滑り振りを見よう。

一ちゃんは野澤以来の同じフォームで（但し内容は洗練されてるが）確實に滑つて行く。近ちゃんはあの身體で軽々と廻轉する様は胸がすく様で頼母しい。ゲロちゃんは小兵よく七尺に餘るスキーを自由に繰つて——近ちゃんの言を借りれば——磐石の如く微塵の危げもない。

Iさんは山形の産、うまく滑る。

EちゃんとKちゃんは派手である。曲り角に來て轉ぶ度にキヤツ、キヤツと叫ぶ。遠くで聞いてあゝまたやつたなと思ふ。その叫び聲が暫く聞こえない時は大變である。轉んだまま半ば瞑目して運命の成行に身を委せてゐるらしい。時々キヤツの代りに「コンちゃん！」と叫ぶ。親切なコンちゃんが飛んで行つて見るとビンディングが外れてゐる時である。轉んでる時傍へ行つても「大變な穴をあけたね。これぢや來年來て見てもまだ穴が残つてゐるかも知れないよ」なんて言つちやいけない。忽ち柳眉を逆立てて「人が苦しんでるのに、あんな憎らしいことを云ふ」と来る。だから僕は黙つて徐ろに煙草の箱を出して一本火をつけると煙を輪に吹いて青空を見上げる。バットの半分程吸ふと御神輿があがる。すると「此處の所を直滑降」とか何とか云つてやる。また少し行つて残つた半分のバットを吸ふ。と云つた状態である。元來僕のスキーは坂に車を落すが如く滑り出したら落ちるに任せて止め様もないアツキラボーなものが今度はおかげで山を眺め雲を仰ぎ煙草を吸つてユツクリ下りて來られたのだから有難い。

不思議なのは松さんである。四日間一しょに居て滑つてる所を一度も見た事がない。事によると松さんはスキーハウスより忍術の方

を練習してたのかも知れない。

夜はまた炬燵に入つてコーラス。河鹿の様な一ちゃんに今度はカナリヤのソプラノが混つてゐるが、野澤温泉時代變聲の叫びであつたのを違ふ處である。

四日の朝も遅い。十時半頃出る。

今日は割に天氣がよく藏王小屋に着いた時は日がキラ／＼輝いてゐた。小屋で晝寝をしてた法政のO・B、田中菅雄君に會つて一しょに近ちゃんや手塚君とサンゲ坂を上る。上つて少し行つたら直ぐガスが來て頬を打つ風が寒い。歸らうぜとアツサリ切上げて小屋に下りて來たら一ちゃんとSさんがゐる。是で更にスターが一枚加つたわけだ。此のお嬢さんの腕前は如何かなと思つてゐたらなかなかどうして上手なのには驚いた。何しろ僕などの我武者羅な我流一點張りで心臓と脚の力に物を云はせて唯フツとばすのを違つて誠にどうも法にかなつてゐる。どんな急斜面でもステムボーゲンでスラリ／＼と下りて行く。聊か瞠若たる所がある。他人様の心配よりも自分の轉ばぬ用心をしなければならない。

夕方船本の文ちゃんが一人でやつて來た。今夜は新來の二人を加へて十人の大合唱である。歌は「スキーハウスの寵兒」の主題歌。まことに藝術的なもので音痴で惡聲の私には手に負へない代物だった。

五日は朝から吹雪いてゐた。今日は大半が下りてしまふ。一ちゃん、文ちゃん、Iさん、Sさんと一しょに大平コースを上る。吹雪の中を藏王小屋に着くと暫く休んで文ちゃんと下りて來た。雪が吹きつけて前が見えないが面白い滑降である。足の指のない

文ちゃんが踵で巧みに制動して下りて行く所を見るとなまじ自分の足に指のあるのが餘計なもの様な氣がした。

今日下りるのは近ちゃん、松さん、Iさん、Eちゃん、Kちゃん。それに文ちゃんが昨日来て今日歸ると云ふ。それちや送別會をさ十二時から炬燵の上でさゝやかに烏賊の刻んだ様なものをしてやぶりながらビールの栓を抜く。歌つたり踊つたり（尤も踊つたのは近ちゃんが例の國賓級のを出した丈けだが）宿の堀さんが講習の晝休みに歸つて來たのがエツヘツへと笑つて入つて來たり、そしてまた出て行つたり（それは當り前の話だが）兎や角してろ中に三時になつて狼狽て仕度をして荷物をまとめて「忘れたものは後から來る人に頼んだよう」と宿を出たのが四時少し過ぎてゐた。僕と手塚君とは甘酒茶屋まで送ることにする。

雪がチラつく中を甘酒茶屋で一寸暖まつてそれでは左様ならと一人一人が滑つて行く後姿を見送つてると妙に淋しくなる。暗くなつた雪道を手塚君と二人黙々として歩いて行くと、昨日一昨日のお天氣のよかつた藏王小屋の邊りの事が思ひ出される。近ちゃんがお尻に下げた熊の毛皮を振つて人間の様な格好で滑つて行く。Eちゃん、Kちゃんがキヤツキヤツと騒ぐ。松さんは寫眞をとりに行つたのか姿を見せない。コーポルト・ヒュッテからザンゲ坂へかけての樹氷が上に行くに従つて玉を連ねた様にうづ高く、風が吹けば珊瑚と鳴り渡りそうだ。三寶荒神の切落した様に怒つた肩にカット陽が照りつけると磨きをかけた様に白い。

雪山の清らなれば　かくも切なく眼に浮ぶ

高湯に歸り着いた時は電燈の光が降る雪ににじみ出る様に淡く

輝いてゐた。（終）

九州から藏王へ

近　藤

昭和十三年も段々押し迫つてクリスマス前になる。僕の心は體を大牟田に残して東京の空に飛んでしまつた。それ程東京の空が戀しいのである。而も東京にはベンちゃんが藏王へ一緒に行つてやる。スキーやを押し立て、待つて居る。更に嬉しい事は熊さんも一緒であるし、殊に依る。學校の新進も顔を見せるかも知れない。全く汽車が熱海を過ぎてからは胸がわくわくしてどうも落付かない。

元旦はそれでも年賀で相當忙がしかつた。昨年の正月はスツカリ酔ひつぶれてベン公を新宿驛頭に待ちぼけを喰はし、到々黒菱の小屋から細野スキー場迄毎日通はしてしまつたあの憎むべき酒が此の元旦も相當僕を苦しめたが本年は如何なる事があつてもさ自肅自戒して上野驛に向つた。處が驚いたれ、驛はスキーの林だ。肩々相摩して到底ベン公も熊さんも見附けるどころか乗れるか乘れないかで見當がつかない。今は是れ迄さ大牟田で鍊へた腕力を振つて何んとか列車に乗つたが然し駄目である。

何が駄目だ、いや總てが駄目である、列車の中で立つたきり動きがされない。過ぐる年奥秩父で孫さん等と奥千丈岳の下の密林で木に挿つて絶對絶命に動けなくなつたのと全然同じである。是れで明朝迄とは實に情けない次第であると考へて居た處松ちやんが窓の外から僕の席は占領してあるから早く來いと云つてくられた、實に地獄に佛とは此の事である。

で早速と思つて周圍を見廻はし落膽した、身は密林中につつて到底行動を起す餘地が無い。三十分程それでも何んとかしてさ、もぢくして見たが到々悲しい諦めの世界に到達してしまつた。總てが駄目さは此の事を云つたのである。

此の一晩は僕に色々な事を考へさせた、

「九州くんだりから此の苦しみをして何故に汝はスキーに行くや。」

氏曰く「分らず」

「汝の健康は今晚中持ち堪へ得るや」

氏曰く「迷酒腹中にあれば平氣なる可し」

「汝廢水處理は如何なる方法に依るや」

氏曰く「身は密林中にありて到底行動を起し得ず、總て忍耐の二字を以つて貫く事とす」

× × ×

到々山形驛迄立ち通して來てしまつた。驛で久振りでベン、熊、松公、それに手塚の晴ちゃんが突然として現はれる、ウワー、嬉しい。

もう言葉が出ない。只ニヤ〜として居る外、何んとも云へない感激である。

熊さんのお連れに御婦人二人と紳士一人が居る。驛の前の宿屋で紹介された。話に依るとは等御婦人は既に小生の名を知つて居る事、一寸吃驚。

それから高湯迄、待望の雪を満喫してスキーは獨りでスイ〜と滑り進む。

これで九郎ちゃんが一枚加はつたら考へた、怖はいれ、又野澤温泉の時の様に蒲團蒸しでもやられたら、今度こそは死んでしまうかも知れない。あんな恐ろしい奴とは二度と一緒に泊りがけのスキーは止そう、歩きながら決心する。それからの四日間は天上の樂園だ。

熊さんは昔の様に尻を立て、盛んに見事な廻轉滑降を試みるし、ベン公一意專心目的に向つて直線的滑降を以つて一路邁進し、晴ちゃんこ來たら昔より更に輪をかけて實に立派な技術を以つて羨しい位に見事に滑つて居る。然しそに誠に不可思議な事が一つある。それは松ちゃんのスキーである、登りは確かに一緒に登るんだが仲間の者一人も彼の滑つて居る處を見た者が無い。是は到々滯在中續いた。實に不思議である。一度彼の滑降を見てやらうと僕も考へたが到々見る事が出来なかつた。

然し、彼とてもスキーはつけて居るんだから確かに滑つて下るのに違ひない。然し歸途半鄉迄の夜道で突然僕の前に現はれてズテンと轉んだ怪物があつた。是れが松公であつた。が眞暗でどんな滑り工合をして居たのやら、てんで分らない。

懺悔坂の下で法政の先輩田中菅雄氏と熊さんとの會合なんてものは矢張り山の友らしくて感心した。

目の前を突然ウナリを立て、滑り下つた一怪漢（普通のオーバーを着込んで耳には兎か何んかの耳輪をはめた異様の風體）が確かに菅雄らしいと熊さんが遙か下の方に向つて三度程「菅雄！」と大聲をあげて呼んだが早や怪漢は林の中に消え去つて分らない。熊さんはしきりに首をかしげて、どうも恰好は變だが「菅雄らし

い」を云つて自分も滑り下つて行つたら田中氏の方から呼び止められたらしい。誠に一瞬間に中に舊友なりと直感した洞察力には感心もし又切つて切れぬ山の友の交はりは斯くも深きものかを感じさせられた。

四日には島野さんとか云ふ女流スキーヤーが来る事になつてゐた。ベン公と晴ちゃんさ僕さは懺悔坂を上つて行つたが天氣が悪くあつさり諦めて藏王小屋に滑つて來たら熊さんとか女流スキーヤーが來て居た。とても荒さんに似た婦人で飛燕の如き滑り振りである。

そして四日の晩は最後の宴會でもするつもりで途中から參加した船本君が喉をビクンさせて居た處何しろ婦人が三人も居るし熊さんは怖い顔をして讚美歌の様な山の歌を島野女史から教はつて一人一人歌はして駄目くそ奴鳴る有様で手のつけ様がない。到々床の中にもぐり込んでしまつた。

處がものゝ三十分もたつた頃隣の部屋で寝て居た船本が「コソ泥」よろしくと云つた姿でスーと障子を開け、内密の聲で「ヨンチヤン」と呼んで居る。何事ならんと片目を開けて見るとこわ如何に、船本の野郎左手に麥酒一本さげて右手でオイテとをして居る。

斯うなると考へざるを得ない、熊さんが先輩なら俺だつて先輩だ、その先輩の内でも硬骨漢で知られた我輩をビル一本で釣らうなんて「フティ」野郎だ。

熊さんは依然として怖い顔をして僕の部屋に寝て居る、僕も愈々意を決して隣のベン公に合圖をする、更に其の隣の松公も起し

て扱て隣の部屋で一杯やろべ！としたが既に隣の部屋には三女性御就寝中である。

遂に虎穴に入つていや熊穴に入つて宴會を開く、先ず小生とベン公の夜具を片方に寄せて宿の女中を動員して「ヒール」を運ばせて肴を持参させ一杯やつた時のうまさと來たらこたえられねえ、而も聲を絶対腹中に入れて笑ふんだから其の苦しさを來たらお話にならない。聲を出さずに笑ふ、全く禪の修練も斯くやと思はれる位。

船本の野郎はれで高湯に來たかいがあつたと云ふ様な安心立命の顔をしてニコくして御座る。フティ野郎であるが又實に可愛い奴だね。こんな事を書いて居る全くきりが無い、實を云ふと此の宴會で小生のスキーハ行も錦上花を添へた理である。

フティのはこちとらかも知れない、其内に東京へ出たら文ちゃん改めて一杯やらうぜ。

神經痛記（其二）

浩一郎

さて、畠毛温泉とはどんな所か、どうしてそこを選定したかといふことになるが、今度の温泉は病の性質上少くとも次の條件を備へてゐる必要がある。

- (1) 暖い地方にあること
- (2) 交通の便利のいゝこと
- (3) 療養本位であること
- (4) 閑静であること

温泉地は相當知つてはゐるが、山登りの汗を流す所だつたり、會社からコラサノサ本位で行つた所だつたり、療養本位でも草津や、磯部では凡そ神經痛とは縁が遠い。そこで虎の巻日本温泉協會編纂するところの温泉案内卷末效能一覽表の神經痛の欄を物色するこ峯、鬼怒川、修善寺、畠毛……ある。峯は下田に近い所でチト遠すぎる。鬼怒川は修羅場だし、修善寺はコラサノサ色が濃い。そのつまりは函南驛からバス十分、旅館六軒といふ畠毛がいゝらしい。更に虎の巻第二卷伊豆温泉名所遊覽案内所發行「伊豆の番頭」二二〇頁を繙くここうある。

「此温泉は丹那山西麓に位置し、入浴適度の塩類泉で良く温ります關係から、レウマチ、神經痛等に特効があり、極閑静に落付いた温泉場で勉學著述靜養等に適します」

意大利に動きつゝあつた所へ文藝春秋十一月號山、温泉欄(一〇六頁)で吉田團輔氏の曰く

「讀書の樂める温泉、畠毛、丹那トンネルをぬけてすぐの驛を函南といふ。そこからバスで十分、名のやうに狩野川流域にひらける田園が、温泉場の前にあつて素朴であり土の香が身邊にせまるこゝではそんな田園風景の他に愛鷹山の上に富士山が肩のあたりから上をのぞかしてゐる風情がよい」

かくて机上のプランに於ては最早動かすべからざるものとなつた。所へ會社の事務員娘見舞に來り談偶々畠毛に及んだところ「去年沼津へ遊びに行つた歸途に行つてきましたわ、とても閑静でいゝ所、きつと効いてよ」

さてこそいさ朗に、函南驛に下車したのである。所が、あるべ

き筈のバスがない。ハテ、インチキかなと思へど致方なし、工印のハイヤーを飛ばす。

「運轉手さん、バスが連絡してゐ筈だが」

「え、ガソリン統制での列車丈連絡しないんです」

畠毛温泉は其名の通り畠の中にあるアルカリ性炭酸泉である。

旅館六軒、雜貨兼御土產店二軒、床屋一軒、其他は全部地元民家といふ仙境である。東京式のものは何一つ無い。晝は百舌鳥の獨天下、夜はジーンと鼓膜の痛くなる程静まりかへつた閑寂境實に讀書に、思索に、靜養に好適の土地である。滞在費は頗る廉く最低二圓から最高五圓止り、それ以上豪遊なさりたい方は御相談下さいとパンフレットに書いてある。温泉は水晶の様に透明で四十二三度の微温湯(熱好の方には沸湯もある)だが、ものゝ二十分も

浸つてゐるこ上つてから全身ボカ～として頓に爽になる。それが、神經痛、レウマチ、脳病、婦人諸症にこてもいゝこある。浸つて暫時するこ、サイダーの様に泡が肌に、霧の様な細い泡が全身の生毛に附着する、これがマツサージやエマナチオンの効をしてそれがホカ～の靈作用をするこある。浴室の入口に「殿方用靈泉」の掛札がしてあるのだから心臓の強さが推し測られやう。かゝる仙境の靈泉に浴して癒らなければそれはもはや第四〇五病でも手の下しやうが無いのだらう。此靈泉に浴すること無慮十日、天帝も其精進振を嘉し給ふたか、踵歩きの曲藝も出來るやうになり、咄嗟の場合には走れるやうになつた。五才の次男にお手々を引かれた當時を顧ると夢の様である。

さて、神は何の故あつてか此苦難を垂れさせ給ふたかといふこ

さになると甚だ六ヶしい。宿の女中の梅さんがいみじくも喝破した「飲み過ぎ」が原因やら、會社の若い連中が御世辭旁々「過勞でせう」さいふのが本當やら、千軍万馬の先輩連が「北京の崇りき」さいふのが眞相やら、或は其三つが因となり果てなるのやら、いや、更に、神のみぞしろしめす應報であるのやら、凡夫にはトンント推測しかれる。こゝには唯、日頃甚だ頑健である徒輩に（即諸君の多くが其候補者である）突如として襲來し、容易に撃滅し難い代物であることを特に悲痛なる體験を以て忠告したい。

此頑敵果して逆襲して来るか、將又ユンニヤクの温撃、靈泉の泡撃に殲滅されたか、もう少し日が経つてみなければわからない。願はくは此誌上を再び煩はしくないものである。（終）

通
信

○鷹野雄一君より（十二月二十六日附 新羅君宛）

お便り有難う。お元氣で御活躍の由安心致しました。學窓を離れて實社會へ入つても山は益々懷しい様に、軍隊へ來ても片時も忘れられないのは山の事、スキーの事、それと同時に山に結ばれた諸兄の顔が次々と私の頭の中に浮いてくる。私的人生に山の興へた影響の意外に大きいのに時々今更の様に感心してゐます。原智恵子氏のリサイタルに行かれたとの事、羨望の限り。何か面白いお話でもお知らせしたいけれど、今のところ平凡で材料がありません、何れ其の中に又お便りしませう。小谷部や望月、小林皆入管でしたね、流石非常時です。針葉樹會の盛會は何より嬉し

い。それから針葉樹の會報は私の生きてゐる間は横濱の方へお願ひします、もし生きて歸へたら楽しみですから。ではお寒い折柄お體御大切に、又お便りを待つてゐます。早々

山岳部報告（十一月・十二月・一月）

記録

(1) 釜無川・鋸・大武川（一一、一一五） 山田

鋸登頂の日は天氣悪く何も見えず、駒の横を卷いて六方石へ、大武川は矢張路が良くない。

(2) 三峯縦走（一一、五一六） 日江井 他一名

しばらく行けなかつた山行が許されて三峰に遊ぶ、雲取頂上の眺望は素晴らしかつた。

(3) 乾徳山（一一、一三） 榎本 岩崎 船本 日江井 宮城 小泉
常盤教授 他一名

ハイキングをやつて部の懇親を行ふためにこの山を選んだ。素晴らしい快晴、頂上の氣持良き眺望、あり餘る食物でこの目的は完全に果された。

(4) 乾徳山（一一、二〇） 森川

(5) 富士山（一一、二六一一七） 佐々木 原 大塚 山田 小泉
佐藤 森下

冬山トレインング、並びに新入部員佐藤、森下兩君の歓迎登山を兼ねて初冬の富士に登る。雪の状態は非常に良く快的であつた、頂上は零下十八度の寒さであつたが皆元氣にやつてくれた。殊に新入部員の頑張りにはさすがの猛者も恐れ入つた。

- (6) 關スキーリング(一二、一一一二) 原
初滑り、思ひのまゝに滑つた。
- (7) 北穂高天幕生活(一二、一七一一、四) 佐々木 大塚 山田
人夫上條末雄
- 徹底的に雪に打のめされた記録、明けても暮れても雪ばかりの記録。詳細は次号を。
- (8) 乗鞍スキーリング(一二、二二一二九) 鶩崎 原 里見 宮城
高橋 久保 小泉 佐藤 他部員外十四名
こゝも北穂班と同じく毎日雪ばかり、しかし皆元氣にやつた。新人達のハリキリには古額方が反つて舌を卷いた位。一般の人もよく規則を守つてくれたため何の支障もなく有意義な合宿を行ふ事が出来た。
- (9) 武能小舎(一、一一三) 岩崎
小舎から白樺尾根の避難小舎まで往復す。
- (10) 藏王高湯(一、五) 船本
先輩の方々を愉快な日が過せた。
- (11) 志賀高原・滝峠越え(一、八一一二) 原
このコースはいつ來てもよい。
- (12) 湯澤スキーリング(一・八) 岩崎
鬼怒高原(一、二一一二二) 岩崎 大塚 宮城 山田 小泉
檜淵 森下 根本(新入部員)
久方ぶりに部員の懇親スキーリングを行ふ。皆のテクニックはぐんと上達した。

○定期部員集會

十一月十一日 於豫科部室 出席者本六名、豫十一名。冬山計畫決定す。

第一次會を開いてスキーについて色々注意を行ふ。
十一月廿五日 於本科部室 出席者本六名、豫八名、專一名。

十二月二日 於本科部室 出席者本七名、豫七名。

十二月九日 於豫科部室 出席者本五名、豫九名、部員外八名。

乘鞍スキーリング準備會開催。

十二月十六日 於本科部室 出席者本七名、豫九名。

十二月廿三日 於本科部室 出席者本四名、殘留組のみ淋しく國立の小屋にて。

一月十三日 於本科部室 出席者本七名、豫五名。

一月二十日 於本科部室 出席者本七名、豫九名。春山準備會開催。

一月廿七日 於本科部室 出席者本五名、豫五名。

○木村部長を圍む會 十二月十五日 於本科部室

出席者本七名、木村部長を圍んで色々お話ををする。

○卒業部員送別會 一月廿六日 於新宿キリン

卒業部員(森川 佐々木 鶩崎 榎本)
殘留部員出席者本五名、豫八名。

○新入部員紹介

佐藤政雄君(豫二) 豊島區池袋三ノ一、二六四
森下 洋君(専一) 杉並區上荻窪一ノ二二一 藤澤方

根本 大君(豫二) 豊島區長崎南町二ノ二、一五二

○昭和十四年度山岳部委員

代表(岩崎利一) 庶務(大塚武、山田亮三、森下洋) 器具(宮城恭一)

江井正巳、久保孝一郎) 会計(里見治男) 記録(日

記 錄

○黒岳から瀧子山へ 吉澤一郎 他二名

十二月十一日 曇 初鹿野—焼山—黒岳—湯ノ澤峠—大倉高丸

—大谷ヶ丸—瀧子山—初狩

○八方尾根・唐松小舎 中島孚 黒田正治 小谷部全助

一月一日附四ツ谷白馬館發の小谷部君の通信(編者宛)には左の如くあり。

御無沙汰致しました。やつと繁瑣な會社から解放されて、中島

黒田の兩氏と共に廿一日夜行大阪發、一日四谷—黒菱、二日か

ら五日迄滞在して附近を滑り廻る積りです。久し振りに雪の北アルプスに接し感激して居ります。たゞし體もオフィス務めで可成りレベル低下してますから、昔日の頑張りはどうですか?

消 息

矢作太郎君 日本鐵屑統制株式會社(京橋ビル五階)へお勤め

替へされました。

松木謙三君 安田銀行京都支店長代理に御榮轉。

住所—京都市上京區小山板倉町一三

小柳二郎君 舊暦廿八日九段偕行社にて大石和子嬢と結婚式を

挙げられる。新居—中野區打越一九 春日莊

高橋廣三郎君(部員) 杉並區神明町一一七 篠原方へ轉居。

尙詳細は不明ですが、黒田さんの處は女の子さん、太田さんの處は男の子さんが、お産れになつた由です。

関西針葉樹會 十月六日 大阪瓦斯ビル 山口、高瀬兩氏歡迎會

出席者(松木、高瀬、山口、太田、森、岡田、黒田、小谷部、中島)

久しぶりの對面に話がはずみ、秋の一夜をガスビルの屋上で過した。どうも東京からくると會費の滯納を催促されそうな氣がする。別に山口さんも高瀬さんもそんな氣は毛頭なかつたことでせうが、これを「一念三千」とか云ふそうですが、この一念三千組が二三人無理して氣前のいゝ所を見せた。同夜お二人共歸京、大阪驛まで送つた。

關西針葉樹會例會 十一月十五日 大阪歌舞伎座裏きくの屋

出席者(松木、森、岡田、黒田、中島)

關西の針葉樹會は何時でも豪勢なもので如水會で簡単に終つたことは未だ一回もない。大抵一杯呑みながら快談する。第一松木御大將が好きだし、後の連中は皆「オイやらうか」「よしやらう」さばかりすぐまとつてしまふ。氣が合つてゐて他愛ない連中ばかりだ。孫さん不相變時々來阪されるそうですが、何時でも電話で御知らせ下さい。(以上中島記)

針葉樹會新年宴會 一月八日夜 新橋さゝ川

出席者(會員) 中川 吉澤 村尾 近藤 手塚 吉澤松 増山

丸茂 林 松浦 新羅 小谷部 小林 望月(現役) 佐々木

日江井